

はじめに

2023年になってから、全国の市町村でこれまでにない新しい動きが起こっています。明石市が実施した子育て支援の施策を取り入れる動きが、ドミノを倒すかのように広がり始めているのです。子どもの存在を無視してきた社会。その社会がようやく子どもに目を向け始めています。この動きは、今後地方から国を変えていく大きな流れを形づくっていくのではないかと。安心して子育てができる社会が実現すれば、絶望的なまでに落ち込んだ出生率は必ず回復するはず。将来、歴史を後から振り返ってみるならば、この流れは日本社会が転換するひとつの大きなきっかけになるやもしれません。そのことを私は今ひしひしと感じています。

私は12年前、明石市長選に立候補したとき、ビラにこのように記したことを覚えていません。

「街をつくるのは、ひと。これからの明石をつくるのは、今の明石の子どもたち」

「子どもたちに借金を残すようなムダ使いをやめ、がんばる子どもたちを、街全体で応援する。そんな明石をつくっていきたい。それが明石の未来につながると信じている」

以来3期にわたって市長を務めました。が、ピラに記した、「子どもは未来」という街づくりへの基本的な思いは、大学生のころからまったく変わっていません。

本書で詳しくお話しますが、私は市長として明石市独自の「所得制限なしの5つの無料化」（「18才までの医療費」「第2子以降の保育料」「おむつ定期便（0才児見守り訪問）」「中学校給食費」「公共施設の遊び場」）をはじめとする子育て施策の充実を図り、10年連続の人口増、8年連続の税収増などを実現してきました。

明石市で実施した施策には全国初が多い。もともと、これらは国がやるべきことをやらないから市としてやってきただけのことです。グローバルスタンダードに照らせば当たり前前のことをやってきたにすぎません。

なぜ国がするべきことを地方の自治体がせざるをえないのか。それはひとえに日本社会があまりにも上意下達のシステムでがちがちに固まっている「横並び主義」「一律主義」

だからです。つまり、行政のレベルでいうと、市民の上に市町村などの自治体があつて、さらにその上に国がある。国の中心にいるのは官僚や国会議員。まさにピラミッドの構造になつていて、一番下にいる市民の声はまともに掬い上げられることはありません。日本人の「お上意識」の強さは、この古いシステムが非常に強固だからに他なりません。

日本は、出生率も人口も下がりがつづけています。失われた30年といわれる経済事情を背景に賃金も生活水準も上がりません。それゆえ未来に希望を持ちにくい社会になつてしまいました。上意下達のピラミッド型社会の構造が大きく変わらない限り、日本は坂道を転げ落ちるように国の形を失つていくだけです。そのことを私は強く危惧しています。

ピラミッド型の社会構造に対して、私が考えるのは同心円状の社会です。一番真ん中には市民。それを囲む形で市町村があり、その外側に国がある。何よりも最初に「市民ありき」です。市民の声を掬い上げることで地域の行政が動き、国がそれを調整・補完する。明石市が市民の声を徹底して尊重したように、国も国民のほうを向き、本気で国民の声に応える政治を行えば、日本は必ず再び国の形を取り戻していくはずですよ。

これは政治家を志した原点であり、他の著作でも紹介している話ですが、なぜ私が明石市の市長になろうと思ったのか。その理由を最初にお話ししておきます。

私には生まれつき障害を持っていた4つ下の弟がいます。弟は歩くことができませんでしたが、家族一丸となって必死にがんばった結果、5歳で何とか歩けるようになりました。その弟が私と同じ小学校に入学しようとしたとき、明石市は「足が不自由なら養護学校（現在の特別支援学校）に行け」と言ってきたのです。けれども、養護学校に行くには、電車とバスを乗り継いで行かなければなりません。のろのろ程度しか歩けない弟に、長時間の徒歩移動はとて無理な話です。子ども心に「なんで明石市はそんな仕打ちをするのだろう」と信じられない思いでした。

両親はそれでもくじけず、弟が私と同じ小学校に通えるようにしてほしいと市に訴え続けました。その結果、弟は小学校に通えることになりましたが、市から2つの条件を提示され、誓約書を書かされました。それは①「何が起ころうとも行政を訴えないこと」、②「送迎は家族が責任を持つこと」の2点。うちは貧乏漁師一家だったので早朝から夕方まで両親は仕事をしており、弟の送り迎えなどできるわけがありません。必然的に兄である

私が、弟の登下校に付き添うことになったのです。

弟は小学1年生、私は5年生。雨の日も風の日も雪の日も、私のランドセルに2人分の教科書を入れ、弟の手を引きながら学校に通いました。私たち兄弟の姿を見る周囲の目は冷たく、誰も手伝ってくれようとはしません。そのとき、私はこの社会がいかに冷たいものなのかを痛感しました。小学5年生にして世の理不尽さを嫌というほど味わい、こう思うようになりました。

「冷たい社会をやさしい社会に変えたい」

「私たちのように苦しむ人をこれ以上増やしてはいけない」

それなら、大人になったら明石市の市長となって街を変えよう。そう決心したのです。私が10歳のときです。

私は、自分が生まれ育った明石の街を誰よりも憎み、誰よりも愛してきました。市長になって明石の街をやさしくするために、誰よりも明石に詳しくなろうと努力も重ねてきました。今の私は、全人類の中で一番明石に詳しいはずだという自負があります。

「困っている市民に手を差し伸べるのが、政治や行政の使命・役割」

これが市長を務めてきた私の一貫したスタンスです。溺れかけている市民がいれば、すぐに助けに行く。その邪魔をする人間がいれば、そいつを突き飛ばしてでも市民を助けに行く。それが市民から選ばれた市長の使命・役割であると肝に銘じ、12年間走り続けてきました。

本書では明石市長に就任してから打ち出してきた数々の施策を交えながら、自治体が抱える課題をいかに察知し、解決策を考え、実行してきたのかを明らかにしていきます。ことに子育て支援施策はどの自治体でも、あるいは国でも応用できる普遍的価値を持つものです。そこを手掛かりとして、これからの地方自治や国の政治のあり方についてもさまざまな角度から考察していきます。タイトルにもあるように、「日本が減じる前に」具体的な何をすればよいのか、そのヒントにもなるはずで

終盤にはこれからの展望、計画などにも触れていくので、ぜひ最後までお付き合いのほどを。

目次

はじめに

第1章 シルバー民主主義から子育て民主主義へ

「異次元の少子化対策」に対する間違った思い込み

「所得制限なし」の無料化施策が経済効果を生むのはなぜか？

経済のまわし方には2つの方法がある

「財源がない」はウソ

日本が新しい時代へと動き始めた

市長の仕事は3つだけ

「全国初」はなぜ抵抗感が強いのか

子育て施策は、「未来施策」に軸足を置く

子どもが発見されていない国、日本

第2章 「明石モデル」をつくれた理由

みんなでみんなを支えていく街にする

潮目は、シルバー民主主義から子育て民主主義に変わった

人口増も税収増も達成したが、それは目的ではない

明石市にはできて、国にできない理由

最重要の2つの権利を実行しない首長たち

副市長とはいかなる存在か

やるべき仕事の優先順位をつける——マスト、ベター、メイ、ドント

消防車1台が2億円の世界

明石市はジェネラリストとスペシャリストを兼ねた職員を増やす

反対することで存在意義を示す議会

「サイレントマジョリティー」の市民と「ノイジーマイノリティー」の議会

市民と市長の距離が近づくことで起こるハレーション

わがままのすすめ

明石の強みをフォーカスして生まれた市政

第3章 地方再生に方程式はない

「大切な故郷」と思ってもらえる街づくり——明石をタコの街に

タコ焼きの元祖は明石焼

業者を潤すばかりの観光競争

現金ばらまきの移住政策は間違っている

子どもの心の故郷になる街づくり

全国一律という発想はもうやめる

公共事業が効果を生む時代はとっくに終わった

ふるさと納税、マイナンバーカードは天下の愚策

第4章 「地方」と「国」の関係をつくり直す

地方と国の理想的な関係とは？

子どもの貯金を親が勝手に使うようなことを国はする

地方は国のムダ遣い競争を担わされている

縦割り行政の谷間に光を当てる

市長をしていた12年間で残念だったこと

出生率をV字回復させたフランス

全国初の施策は、海外にモデルがある

地方議員は今の3分の1以下でいい

選挙は完全自由化にしたほうがいい

都市の一極集中はどこまで問題か？

私が県知事になったら「県」を解体したい

独立国家「明石国」という夢想

〈コラム〉大化の改新まで明石市は「国」だった

第5章 日本が減びる前に

日本は民衆が社会を変えた歴史を持っていない

日本のエセ民主主義を本物の民主主義にするために

政治家が決断せず官僚に従っている国、日本

私が総理大臣なら何をするか

中央省庁を解体・再編せよ

消費税増税という発想の誤り

官邸の広報紙に成り下がった大新聞の罪

恩師・石井紘基さんに学んだこと

マザー・テレサとロールス・ロイス

今の時代に必要なリーダーは「転換を図るリーダー」

政治におけるSNSの可能性と危険性

「詰将棋」の発想でやってきた

人は誰もが障害者

こども家庭庁への期待と失望

目には見えない流れで世界はつながっている

2023年、統一地方選挙のその後

おわりに 政治は政治家だけがするものではない